

諸外国の教育事情から見た我が国の「特別活動」に関する考察

下古立 浩 [鹿児島大学教育学系 (教育実践総合センター)]・杉 原 薫 [鹿児島大学教育学系 (教育学)]
山 元 卓 也 [鹿児島大学教育学系 (教育実践総合センター)]・奥 山 茂 樹 [鹿児島大学教育学系 (教育実践総合センター)]

A study on "tokubetsukatsudou" in Japan from the viewpoint of the educational situation in the other countries

SHIMOFURUTACHI Hiroshi・SUGIHARA Kaoru・YAMAMOTO Tatsuya・OKUYAMA Shigeki

キーワード：特別活動、自由研究、特別教育活動、ドイツ、基礎学校

1. はじめに

近年、我が国の学校教育、とりわけ掃除や給食、当番活動や学校行事といった教科の授業以外の「特別活動（特活）」が「tokkatsu（トッカツ）」として海外から注目され、日本への教育視察は年々増加傾向にある。これは、諸外国の学校では教科の授業を中心に教育課程が構成されており、「特別活動」が一般的に行われていないこと、日本の子どもたちが身に付けている規律への意識や社会性の高さへの各国教育関係者の興味に起因する（朝日新聞2015）。

二宮（2014）は、世界の学校をこの「特別活動」を基準に大きく三つに分類している。第一は、教科中心の教育課程のもと「特別活動」が行われていない学校であり、ドイツやデンマーク、フランスなどのヨーロッパ大陸で典型的に見られる。第二は、社会主義イデオロギーを学校教育に組み込み、教科の時間に限定せずにその思想・規律を子どもたちに伝えていく学校である。このタイプの学校は、中国やキューバなどの社会主義国で見られる。第三は、教科以外の教育活動が正規の教育課程に組み込まれてきた学校であり、アメリカやイギリスで見られるタイプの学校である。これらの学校では、スポーツ活動や文化活動、レクリエーション活動、社会奉仕活動、科学的な活動などの「クラブ活動」が活発に展開される。日本の学校もこの英米型に属すると言える。

本稿では、近年世界的にも注目されている我が国の「特別活動」を教科中心の教育課程を有するヨーロッパ大陸の学校—ドイツ—と比較し、考察することで、その意義についてあらためて考察する。本テーマにかかわる研究として子どもたちによる主体的な学級会活動に焦点を当てた松岡（2014, 2015, 2016）や児童会活動に注目した山田（2009）を挙げることができる。本稿ではこれらの研究の知見も参考としながら、教科の授業以外の教育活動を幅広くとらえることで我が国の「特別活動」の特色および意義を浮き彫りにしたい。

2. 我が国の「特別活動」に関する歴史的経緯

2.1. 学習指導要領以前の成り立ち

まず、学習指導要領以前の「特別活動」にあたる活動の特徴を中央教育審議会の教育課程部会特別活動ワーキンググループの資料をもとに概観する。

- 明治時代後期から、各学校では、修学旅行や運動会などの学校行事が独自に企画され、その教育的な意義が認められていた。また、部活動の設置とともに学校内の自治会的な活動も盛んになっていった。
- 1947年(昭和22年)の学習指導要領試案では、「自由研究」という教科が設置され、通常の教科で学習したことを有機的に発展させて学ぶ時間として想定された。
- この教科「自由研究」が現代の特別活動の原型になったといわれている。しかし、教科「自由研究」については、理解が進まず、また現場における適切な実施も困難であったため、1948年(昭和23年)の学習指導要領の改正時に廃止され、小学校では「教科以外の活動」に、中学校では「特別教育活動」に再編された。

すなわち、現在の「特別活動」は、明治時代後期から展開された学校独自の学校行事に由来する。このような背景の中、戦後、「自由研究」という教科が設置されたが、理解が進まず、1948年(昭和23年)の学習指導要領改正において、小学校では「教科以外の活動」に、中学校では「特別教育活動」に再編されたことがわかる。

山田(2010)は、戦前の「特別活動」について、戦後の学習指導要領のように明確に文書化されていたわけではないが、授業以外の活動の多くが、当初は国家、もしくは学校による何らかの意図をもって実施されており、国とのかかわりがあったことを指摘している。例として、明治時代、富国強兵をめざす日本にとって健康な国民の育成と頑健な軍人育成が重要な課題解決のための取組であった軍事教練が広まり、そうした活動の一つとして運動会が始まったことを挙げており、戦前の「特別活動」は明文化されてはいないが、国の意向の影響を受けていたことがわかる。

2.2. 学習指導要領における変遷

昭和33年改訂以降の経緯について、特別活動ワーキンググループの資料には次のとおりまとめられている。

- 昭和33年改訂(告示) 小学校・中学校・高等学校を通じて「特別教育活動」(「生徒活動」「学校行事」「学級指導」)に名称を統一。(ただし、特別教育活動には、学校行事が含まれていなかった)。高等学校における「特別教育活動」の目標は「生徒の自発的な活動を通して、個性の伸長を図り、民主的な生活のあり方を身につけさせ、人間としての望ましい態度を養う」と掲げられた。
- 昭和43～45年改訂 それまで包括されなかった学校行事を統合し、名称を「特別活動」に変更。「クラブ活動」は全員必修。
- 昭和52年・53年改訂 「勤労にかかわる体験的な学習の機会を出来るだけ取り入れること」が記された。
- 平成元年改訂 中学校・高等学校は「ホームルーム活動」「生徒会活動」「クラブ活動」「学校行事」に分けられ、「クラブ活動」は部活動による代替が認められるようになった。
- 平成10年・11年改訂 中学校・高等学校の特別活動から「クラブ活動(部活動)」が削除された。

昭和33年改訂以降、現在まで「特別活動」の名称は、小・中学校においては、「特別教育活動」から「特別活動」、高等学校においては、「特別教育活動」から「各教科以外の教育活動」を経て、「特別活動」と変遷してきている。

内容については、次の3点が大きく変わってきている。昭和43～45年改訂において、「特別教育活動」から「特

別活動」に変わり、それまでの「特別教育活動」には含まれていなかった「学校行事」が追加されたこと。昭和52年・53年改訂において、小・中学校について、「児童（生徒）活動」「学校行事」「学級指導」から「学級活動」「児童（生徒）会活動」「クラブ活動」「学校行事」へと整理されたこと。また、平成10年・11年改訂において、中・高等学校について「クラブ活動」が削除されたこと。

このような変遷をたどる我が国の「特別活動」であるが、名称及び内容の変更は、その教育の方向性や対象を大きく変えるものではなく、大きく捉えるなら一貫した教育活動として存在している（【表1】を参照）。

【表1】昭和33年改訂以降の「特別活動」の名称及び内容の変遷

	小学校			中学校			高等学校	
	名称	内容		名称	内容		名称	内容
昭和33・35年改訂	特別教育活動	児童会活動		特別教育活動	生徒会活動		特別教育活動	ホームルーム
		学級会活動			学級活動			生徒会活動
		クラブ活動			クラブ活動			クラブ活動
昭和43～45年改訂	特別活動	児童活動	児童会活動	特別活動	生徒活動	生徒会活動	各教科以外の教育活動	ホームルーム
			学級会活動			学級会活動		生徒会活動
			クラブ活動			クラブ活動		クラブ活動
		学校行事			学校行事			学校行事
		学級指導			学級指導			
昭和52年・53年改訂	特別活動	児童活動	児童会活動	特別活動	生徒活動	生徒会活動	特別活動	ホームルーム
			学級会活動			学級会活動		生徒会活動
			クラブ活動			クラブ活動		クラブ活動
		学校行事			学校行事			学校行事
		学級指導			学級指導			
平成元年改訂	特別活動	学級活動		特別活動	学級活動		特別活動	ホームルーム活動
		児童会活動			生徒会活動			生徒会活動
		クラブ活動			クラブ活動			クラブ活動
		学校行事			学校行事			学校行事
平成10年・11年改訂	特別活動	学級活動		特別活動	学級活動		特別活動	ホームルーム活動
		児童会活動			生徒会活動			生徒会活動
		クラブ活動			クラブ活動			クラブ活動
		学校行事			学校行事			学校行事

出典：各指導要領をもとに執筆者作成

また、文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センターが特別活動指導資料として刊行している「学級・学校文化を創る特別活動 中学校編」には、「我が国の学校教育を特徴付ける教育活動としての『特別活動』」という項において次のような記述がある。

我が国の学校教育は、欧米の教育内容・制度に習った1872（明治5）年の「学制」に始まり、その後の明治20年代、30年代における法改正により試験制度が緩和・廃止され、今日の年齢主義による学級編成で授業がなされるようになりました。

それらの変革に伴い、それまでの成績管理に加え、学校・学級における個々の児童や集団の維持・向上を図る職務が教員の創意工夫として求められるようになり、具体的には、学級における自治的な学級会や儀式や運動会、学芸会など、特別活動の前身とも言える活動が広く普及し、その後の人間形成に大きな役割を果たすようになりました。

戦後においても、1951（昭和26）年の学習指導要領一般編に「教科の学習だけではじゅうぶん達せられない教育目標が、これらの活動によって満足に達成されるのである。」とし、今日の特別活動の内容が学習指導要領（試案）に位置付けられるようになり、その後、1958（昭和33）年に目標及び内容を明示して、学習指導要領に位置付けられ現在に至っています。

このように特別活動は、その成り立ちや内容から見ても日本的な特色を持った教育活動として誕生し、我が国の全人的な教育を特徴付ける学校文化として、以下のような特別活動の特質に基づく役割を果たしながら時代の要請に応えているのです。（以下略 執筆者）

これによると、我が国の「特別活動」は、戦前、年齢主義による学級編成での授業実施のために、個々の児童や集団の維持・向上を図るための活動が広く普及したことに始まり、戦後は学習指導要領に位置付けられ、現在に至るとある。つまり、「特別活動」は、個々の児童や集団の維持・向上を図ることを目的として、自然発生的に生まれ、広がり、学習指導要領により公的な教育活動となっていくのである。

また、「特別活動」は、その成り立ちや内容から「日本的な特色を持った教育活動」であり、「我が国の全人的な教育を特徴付ける学校文化」であると、我が国特有の教育活動であることが述べられている。

3. 「特別活動」の目標と役割

3.1 「特別活動」の目標

学習指導要領（小・中学校 平成20年告示、高等学校 平成21年告示）によると、「特別活動」の目標は、以下のとおりである。

小学校

望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う。

中学校

望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う。

高等学校

望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う。

小・中・高等学校の目標を比較すると、まず「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り」と実施する活動とその活動を通して育む「心身の調和のとれた発達と個性の伸長」と最終的に「自己を生かす能力を養う。」ことについては、全く同じ文言であり、小・中・高等学校を通して、同じ方向を目指す活動となっていることがわかる。

異なるところは、小学校が「集団の一員」である部分が、中・高等学校では「集団や社会の一員」となっており、小学校が「自己の生き方」である部分が、中学校では「人間としての生き方」、高等学校では「人間としての在り方生き方」となっていることの2点のみである。これにより、小・中・高等学校の児童生徒の発達の段階に応じた目標となっている。

この目標の中でキーワードとなっているのが「望ましい集団活動」である。小学校学習指導要領解説特別活動編によると、「望ましい集団活動」について以下のような記述が見られる。

目標に示してある「望ましい集団活動」は、特別活動固有のものであり、特別活動の特質が望ましい実践的な集団活動として展開される教育活動であることを示している。したがって、豊かな学校生活を築くとともに、公共の精神を養い、社会性を育成することをねらいとする特別活動では、学級活動、児童会活動、クラブ活動及び学校行事のいずれにおいても「望ましい集団活動」を展開することが前提となる。

「望ましい集団活動を通して」とは、一人一人の児童が互いのよさや可能性を認め、生かし、伸ばし合うことができるような実践的な方法によって集団活動を行ったり、望ましい集団を育成しながら個々の児童に育てたい資質や能力を育成したりするという特別活動の方法原理を示したものである。

「望ましい集団活動」は、特別活動固有のものであり、展開することが前提となる活動であることがわかる。また、その集団活動は、「一人一人の児童が互いのよさや可能性を認め、生かし、伸ばし合うことができる」ものであったり、「望ましい集団を育成しながら個々の児童に育てたい資質や能力を育成」するものであったりする必要があることが見て取れる。

3.2 「特別活動」の役割

2.2 で取り上げた「学級・学校文化を創る特別活動 中学校編」では、「特別活動の特質に基づく役割」として次の4点を挙げている。

- 集団活動を通して「個」を鍛える「特別活動」
- 中学生期の教育課題に向き合う「特別活動」
- 人間関係や豊かな人間性を育てる「特別活動」
- 生徒の問題解決力と教員の指導力を高める「特別活動」

また、「楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動 小学校編」では、「特別活動に期待されること」として次の4点を挙げている。

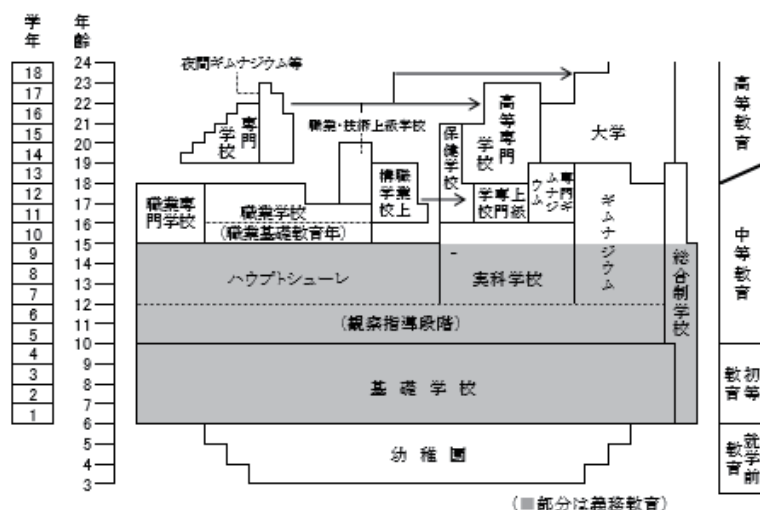
- 学級経営の充実に貢献します
- 生徒指導の中核的な時間です
- 道徳教育に役立ちます
- 各種の「〇〇教育」に期待されています

これらによると、「特別活動」は、児童生徒一人一人の主体性に基づく活動により、個の成長ひいては学級経営の充実につながるものであること、自己指導能力の育成が期待されること、道徳性の育成が期待されること、そして、教員の指導力向上や様々な教育の充実につながることなどが「特別活動」の役割であり、期待されることとして挙げられている。

これまで見てきたように、我が国の「特別活動」は、「日本的な特色を持った教育活動」であり、「我が国の全人的な教育を特徴付ける学校文化」としての特色を有する。そして、現在において、その役割は多岐にわたり、重要なものとなっている。

4. ドイツの初等教育機関における「特別活動」

秋の気配を感じる8月末～9月はじめにかけて、満6歳の子どもたちは基礎学校の1年生となる（【図1】参照）。入学の日、新入生は学用品やおもちゃ、お菓子などが詰まった円錐形の大きな筒シュールテューテを抱えて学校にやってくる。入学の日に合わせて地域の教会ではミサが開かれ（参加は任意）、ミサののち子どもたちは保護者とともに学校へ向かう。上級生による楽器の演奏や校長先生によるお祝いの言葉、配属クラスの発表ののち、クラスごとに教室に行き、教室ではさっそくその日から授業がはじまる。そして、お昼頃に授業が終わり、一連の入学行事が終了する。卒業に際しても、教会でミサが行われる学校が多く、その前後の日に学校で保護者を招いてパーティを催すなどのイベントが行われる。このような儀式的行事のほか、体育の授業などの時間を活用して2学年合同でバレーボール大会やハンドボール大会などを行うこともある。しかし、日本の運動会のように全校をあげてのスポーツイベントは見られない。このことは、日本の小学校においては当たり前のものとして存在している広々とした運動場がドイツの基礎学校にはあまり見られないこととも関係しているだろう。



【図1】 ドイツの学校系統図

出典：文部科学省（2010）「平成22年版教育指標の国際比較」71頁。

子どもたちの一日は学校によって異なるがおおむね7時半から8時の間にスタートする。しかし、クラスによって1時間目がある日やない日も存在し、学校全体の始業時間がない学校もある。【表2】からわかるように基礎学校の3年生ではドイツ語、算数、事物科（理科、社会、地理、交通教育、性教育などを含んだ統合教科）、体育、美術、音楽、入門外国語、宗教といった教科から時間割が構成されている。日本の小学校の時間割に一般的に見られるような朝の会や帰りの会、学級活動や掃除の時間は設けられていないのが一般的である。日本の小学校では「特別活動」に対して週1時間が割り当てられているのに対して、ドイツの基礎学校では教科の授業以外の時間数は確保されていない（【表3】を参照）。このような点からドイツの学校の基本的な性格は、我が国のような「生活学校」ではなく、「知識学校」として特徴付けられる。学校と家庭及び地域社会との教育における役割分担がかなり明確に画されており、学校の任務・守備範囲は、端的に言えば、知識教育の領域にあるためと言える（結城1998）。

日本の小学校では必ず存在する「昼食（給食）の時間」を設けていない学校も多い、子どもたちは授業の合間の休憩時間に自宅から持参したサンドイッチやリンゴ、ビスケットなどを間食として食べる。「昼食の時間」を設けていない理由としてはさまざまあるが、授業自体が遅くとも13時ごろには終了するので、昼食は自宅でとることが歴史的に当然のこととされてきたこと、食事というのは学校に管理されるべきものではなくプライベートな範疇に入るものであるとの意識が根強かったこと、予算などのコストの問題があることなどを挙げることができる。しかしながら、近年、移民が多いベルリンなどの都市部では食育の観点から昼食の時間や朝食の時間を設ける学校も見られるようになってきている。

【表2】ドイツ・ヘッセン州の基礎学校における時間割の例 (3年生)

		月	火	水	木	金
1	8:00—8:45	ドイツ語	入門外国語	美術	算数	—
2	8:50—9:35	事物科	ドイツ語	ドイツ語	ドイツ語	入門外国語
		休憩				
3	9:55—10:40	事物科	事物科	体育	ドイツ語	音楽
4	10:40—11:25	体育	体育	事物科	宗教	算数
		休憩				
5	11:40—12:25	算数	宗教	音楽	美術	算数
6	12:25—13:10	—	算数	促進(算数)	促進(ドイツ語)	—

出典：文部科学省 (2016)『諸外国の初等中等教育』明石書店、182 頁。

表注：「促進」は、学力不振な児童あるいは優秀な児童を対象として、必修授業時間以外に追加的に設けられている授業時間。

【表3】ドイツ・ヘッセン州の基礎学校の教育課程 (週当たりの授業時間数)

教科	学年				計
	1	2	3	4	1～4
宗教・倫理	4		4		8
ドイツ語	12		10		22
事物科	4		8		12
算数	10		10		20
美術・音楽	6		8		14
体育	6		6		12
第一外国語	—		4		4
合計	42		50		92

出典：文部科学省 (2016)『諸外国の初等中等教育』明石書店、181 頁。

また、都市部を中心に昼過ぎに終了していた授業時間を午後にも延長して補習や課外活動などの教育プログラムを提供する「全日制学校 (Ganztagsschule)」が近年、見られるようになってきた。「全日制学校」導入のきっかけは、2001年のOECD「生徒の学習到達度調査 (PISA)」での成績不振にある。学力低下の原因として、子どもの社会的出自による学習環境の相違、とりわけ移民家庭の不適切な学習環境が指摘された。家庭よりも学校で過ごす時間を長くすることでより良い学習環境の提供を目指すようになったのである。「全日制学校」には、①義務型 (在校する児童に参加を義務付ける)、②開放型 (児童の参加は任意)、③混合型 (一部の学級・学年のみ参加を義務付け

る)の三種類があるが、大半は開放型である。多くは決まった曜日の午後にドイツ語やそのほかの教科の補習授業、学級活動やダンスや絵画、スポーツといった課外活動が提供されている。

児童・生徒が望ましい人間関係を築き、学校生活の中で自ら課題を見つけ、解決していくことでより良い学校づくりにとりくんでいく自治的活動として我が国「特別活動」において重要な位置にある児童会・生徒会活動に類する活動は、ドイツの基礎学校でも見られるが、その実施割合はそれほど高くない。これらの活動は、近年の移民の増加や失業率の上昇といった社会変化の下で市民性に係る社会問題を抱えるようになったことから学校に取り入れられたものであり、シティズンシップ教育やデモクラシー教育の文脈の中に位置づけられている（山田2009）。

このようにドイツの初等教育機関では従来、教科の授業が学校教育のプログラムを占め、日本における「特別活動」にあたる教育活動は半ば無視されてきたが、社会変化や子どもの環境の変化が問題とされる中で、朝のミーティングや学級活動、児童会活動を通じて、問題解決能力や学級集団の育成、自己決定や問題の協同解決、コミュニケーション能力を学ぶことの重要性が強調されるようになり、「特別活動」の領域への注目も高まりつつある（山田2014）。すなわち、学校は教科を教える勉強の場であって、クラブ活動などを楽しむための場ではないし、しつけや生徒指導的なケアは家庭の責任であり、学校は関与しないという特徴を有してきたドイツの学校も大きな社会変化の中でその役割を徐々に変化させつつある。

5. おわりに—諸外国から見た我が国の「特別活動」に見られる特徴と意義—

我が国の「特別活動」に関する歴史的経緯や目標、役割とドイツの初等教育機関における「特別活動」について述べてきた。2.2 で触れたように、「特別活動」は、我が国特有の教育活動である。「日本的な特色を持った教育活動」であり、「我が国の全人的な教育を特徴付ける学校文化」として存在している。そのよさは、例えば小学校特別活動の目標にあるように、「心身の調和のとれた発達と個性の伸長」「よりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度」「自己を生かす能力」など、人間関係づくりひいては人間そのものの育成を目的としていているところにある。その意味で、「我が国の全人的な教育を特徴付ける学校文化」と言えるのだろう。

ドイツの学校では、我が国のように「特別活動」が明確に教育課程に位置付けられてはいない。これは、ドイツの学校の役割が知識領域であると、明確に認識されてきたことに起因するものと考えられる。これに比べ、我が国の「特別活動」は、歴史的経緯からも明らかになったように、学習指導要領に明文化される以前から、国の意向とのかかわりの中で存在してきた。つまり、「特別活動」が学校教育に位置付けられるか否かは、両国の伝統的な学校の役割の違いによるものと考えられる。しかしながら、教科の授業が学校における教育活動の大半を占めてきたドイツの基礎学校も社会の変化とともに従来であれば無視されてきた我が国で言うところの「特別活動」にあたる教育活動に取り組み始め、学校教育の役割を拡大させる傾向にある。また、本稿の冒頭で指摘したように諸外国の教育関係者は日本の「特別活動」に強い関心を持っている。すなわち、我が国における「特別活動」は諸外国の教育を大幅に先取りした形で導入、展開されてきたと言えるのではないだろうか。

現在、中教審において新しい学習指導要領の検討が進められている。この中で、諸外国が取り入れようとしている「生活学校」としての特徴や「特別活動」のよさが存分に発揮されることを期待したい。

引用・参考文献

文部省 (1958) 「小学校学習指導要領」

文部省 (1958) 「中学校学習指導要領」

文部省 (1960) 「高等学校学習指導要領」

文部省 (1968) 「小学校学習指導要領」

文部省 (1969) 「中学校学習指導要領」

文部省 (1970) 「高等学校学習指導要領」

文部省 (1977) 「小学校学習指導要領」

文部省 (1977) 「中学校学習指導要領」

文部省 (1978) 「高等学校学習指導要領」

文部省 (1989) 「小学校学習指導要領」

文部省 (1989) 「中学校学習指導要領」

文部省 (1989) 「高等学校学習指導要領」

文部省 (1999) 「小学校学習指導要領」

文部省 (1999) 「中学校学習指導要領」

文部省 (1999) 「高等学校学習指導要領」

文部科学省 (2008) 「小学校学習指導要領解説 特別活動編」 東洋館出版社。

文部科学省 (2016) 『諸外国の初等中等教育』 明石書店。

文部科学省 (2016) 『諸外国の教育動向 2015 年度版』 明石書店。

中央教育審議会 (2016) 「特別活動に関する経緯等について」 (教育課程部会特別活動 WG 資料)

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/066/siryo/_icsFiles/afieldfile/2015/12/08/1364981_1.pdf (2016 年 8 月 26 日参照)

文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター (2016) 「楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動 小学校編」

文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター (2016) 「学級・学校文化を創る特別活動 中学校編」

朝日新聞 (2015) 「授業以外の「特活」に海外関心 考える力、視察相次ぐ」 (2015 年 10 月 25 日)

<http://digital.asahi.com/articles/ASHBJ4V5ZHBJUTIL02L.html?rm=310> (2016 年 9 月 2 日参照)

相原次男・新富康央・南本長穂 (2010) 『新しい時代の特別活動—一個が生きる集団活動を創造する—』 ミネルヴァ書房。

天野正治・結城忠・別府昭郎 (1998) 『ドイツの教育』 東信堂。

磯島秀樹 (2014) 「特別活動のあり方についての一考察」『ブール学院大学研究紀要』第 55 号, 153—167 頁。

末藤美津子 (2008) 「特別活動の新たな課題—多文化共生をめざした取り組み—」『東京未来大学研究紀要』第 1 号, 45—55 頁。

友野清文 (2015) 「学校教育における特別活動の意義—教職科目「特別活動の研究」の実践から—」『昭和女子大学現代教育研究所紀要』第 1 号, 48—60 頁。

二宮 皓編（2014）『新版 世界の学校—教育制度から日常の学校風景まで—』学事出版。

林尚示（2013）「イギリスにおける生徒指導と特別活動」『東京学芸大学紀要』（総合教育科学系）第64巻第1号，1－8頁。

松岡敬興（2014）「特別活動における望ましい『学級会活動』のあり方に関する研究—ドイツ・ヘッセン州における『klassenrat』の取組に学ぶ—」『桃山学院大学総合研究所紀要』第39巻第3号，127-140頁。

松岡敬興（2015）「特別活動におけるいじめの未然防止を促す「体験活動」に関する研究—ドイツ・ヘッセン州における「Service Learning」の取組に学ぶ—」『桃山学院大学総合研究所紀要』第40巻第3号，119-134頁。

松岡敬興（2016）「生徒同士の主体的な活動による『民主主義（Demokratie）の教育』に関する研究—ドイツのノルトライン＝ヴェストファーレン州の Oberen Schloss 校における取組に学ぶ—」『桃山学院大学総合研究所紀要』第42巻第1号，75－93頁。

山田浩之編（2014）『特別活動論』協同出版。

山田真紀（2009）「児童会活動の実践に関する国際比較研究—フランス・ドイツ・オーストラリアの初等教育に注目して—」『日本特別活動学会紀要』第17号，39－48頁。

